

## エドゥワード・セガン「白痴たちの治療と訓練の起源」(1856年)

翻訳 解題と訳注

川口幸宏

本稿は、未邦訳の *Edward Séguin : Origin of the treatment and training of idiots, American Journal of Education, t. II, 1856.* を全訳したものである。

我がことすべてを自身で処することができるのは他ならぬ神のみである。このことから、人類の発見における先取性の問いが、いつも議論される。なんらかの発明に関わる事実史が書かれることがあったとしても、そのことを考えついた人、夢見た人のことしかその記述の中には見出すことができない。その思いつきが実際に方法にまで移されるに至ったことは書かれていないのである。数学者は兵力と指揮との諸関係を正確に計算する、しかしそれらと軍隊に対して為される抵抗との割合については念頭にないのだ。等々。先人の夢と完全なアイデアとの間の多くの介在物と、先人の業績の成果と結びつける人が現れるに至って、発明に新しい生命が与えられ、そして新しい生命に彼の名前が添えられる。

しかし、前の人は、誠実な人であり、人類愛という表現でしか言いようがない人である。尊敬すべき人でしばしば榮譽を称えられている。そしてそれは、十分に意味ある発見が見られるという観点から、ということにおいてである。つまり、その発見は人類共通の財産であり、今日、相互依存と連帯という広く深い感情をもたらしてくれている、というのである。不幸な白痴たちの治療と訓練の起源に関する簡単な報告書<sup>1</sup>は、今日の相互依存の原則を素描したものであると思う。

1801年のこと、市民階級ボナテール<sup>2</sup>氏が、フランス、アヴェロン県の森で一人の野育ち<sup>3</sup>の少年を発見した。この裸の少年の身体にはおびただしい傷の跡があった。少年はシカのようにすばしっこく、木の根や木の実を食べて生きしのいでいた。彼は木の実をサルのように噛みくだいていた。雪が降るのを見ては笑い、一面を覆ったその白いモノの上を大喜びで転げ回っていた。17歳ほどと思われた。ボナテールはこの野育ちの少年が捕らえられても逃げてしまいがままにしていたが、やがて少年を拘束し、自費で、パリの聾啞者のための保護施設長であるシカール師<sup>4</sup>のもとへ送り届けた<sup>5</sup>。

シカールはちょうど高名なレペ師<sup>6</sup>の跡を継いだばかりであった。それで、ボナテールは、彼が夢に見る奇蹟——この動物の、これまで見たことのある中で人間の姿をしたもっとも劣った生き物の、教育——を果たしてくれるにもっともふさわしい人、であると、シカールのことを考えた。だが、それは思い違いであった。シカールは、衣服を着せられるたびに脱

ぎ捨ててしまい、窓からさえ脱出を試みてしまう生き物に、数日の間、学問的な興味を寄せただけであった。その後、シカールは、広大な聾啞学校を生き物が意のままに歩き回るままに任せてしまったのである。

しかし、アヴェロンの野育ちの少年はパリ中の注目的になっていた。大勢の訪問客が少年を嫌悪対象として見るようになってからも、彼は思想家や哲学者の心に旺盛な興味を引き起こさせた。世界の自由についてフランクリン<sup>7</sup>と議論を交わした人々の何人かは、当時まだ、活躍中であった。それで彼等によってこの少年は被験者として科学アカデミー<sup>8</sup>へと持ち込まれたのである。そこでは興味深く実り豊かな議論が為された。

とりわけ、ふたりがアヴェロンの野育ちの少年に興味を寄せるにおいて際だっていた。すなわち、ひとりにはピネル<sup>9</sup>。彼は精神病院の主任医師であり、哲学的病理学の創始者であったが、その彼は少年が白痴の状態であると言明した。このことが正しい指摘であったことは後に証明されることになる。もう一人はイタール。彼は聾啞学校の主任医師であった。かれは被験者はたんにまったく指導されてこず無知なだけだと断言した。断言しただけでなくそれ以上のことをした。つまり、彼は少年をヴィクトールと名付けたのである。少年に、動物的本性を乗り越えて、教育の成果が現れるはずであるという勝利の印として付けられたものであったことは疑うべくもない。イタールはさらに突き進んで、少年を自身の家に受け入れ、彼のために住み込みの女性家庭教師を雇用し、彼のために6年もの時を割いた。それは本務とのかねあいではなされたが、時には終日少年に掛かりっきりということもしばしばあった<sup>10</sup>。

この子どもと科学に対するイタルの献身は賞賛されるにふさわしいものではあるが、形而上学的な誤りに基づいていた。彼の努力には期待はずれがついて回った。それでも彼は決してくじけなかった。彼の誤りは次のようなことであった。すなわち、彼はかたくなに白痴を未開人だと見続けた。また研究を、それは同時に失敗でもあるのだが、ロック<sup>11</sup>やコンディヤック<sup>12</sup>の唯物論に根拠を置いていた。彼の指導は時としてその生徒の諸感覚に届いていたが、けっして、生徒の精神や魂にまでは及んでいなかった。彼は生徒の諸感覚に物ごとの諸観念を幾つか与え、生徒を抱きしめることで自然な感情を起こさせさせた。しかしながら、生徒は、知識や社会感情あるいは道徳感情は貧困なままであったし、労働はできないままであり、その結果、自立性が欠落したままであった。少年は、そういった痛々しく実りのない挑戦の果て、ある病院に幽閉されてしまったのである。彼はそのあとの人生を、そこで過ごした<sup>13</sup>。

しかしながら、この6年間はアヴェロンの野育ちの子どもにとってほとんど失われた時間であったとしても、その6年間はイタルの心に果実を実らせた。イタルは耳の病気の研究に没頭することになるが、時にはその若き日の実験に思いを馳せ、彼の名が外科医

として高名になってしまったことを悔いた一彼の名はヨーロッパ中に知れわたり、彼のところにはあらゆるところから患者が送り込まれた。しかし、博愛主義的な研究と実験をする暇など、彼には無かったのである。

このような心の状態にあった時、1837年のこと、イタールはパリの児童病院の院長である、かの有名なゲルサン<sup>14</sup>から、ひとりの若い白痴の患者について相談を受けた。「もっと私が若かったならば」とイタールは興奮した声で言った。「私自身はその世話の任に当たりたいのですがね。でも、適切な人を私のところに遣わせて下さい。そうすればその人の取り組みの舵取りを私がして差し上げます。」ゲルサンは彼に私のことを告げた。イタールはわが父の医学生時代の同窓であった。光栄なことに、「もしセガンが受諾するというのなら、その世話の結果に応えましょう。」と、イタールはそう言ったのである。以上のように描いてみて分かるように、三人が白痴たちの状態の改善への偉大な冒険への先導を切ったのだと言えよう。心が広く熱心なアヴェロン<sup>15</sup>の少年の保護者のボナテール、慧眼な分析によって被験者を白痴の状態だと明晰にしたピネル、献身と根気と賢明が改善の方法を切り開いたイタール。

ゲルサンが私に、イタールが中断してしまった仕事を継承するという、それは失敗の可能性が少なくないのだが、光栄あることを示唆してくれた時、私は、一時は死を覚悟したほどの病気から回復しつつあるところであった。向後会うことなど望むことのできない人の耳に私の名を届けたいという願いが、その冒険に挑戦する勇気を私に与えてくれた。イタールは、彼が初期の生徒たちと一緒に行ったことの詳細を私に語ってくれた<sup>15</sup>。さらに私は、彼の後に試みられ実行されたあらゆることを研究した。

ガル<sup>16</sup>は脳機能研究の推進に大きく貢献した人だが、白痴の原因についての問題提起をした。腕のいい理論家で、彼は、白痴者たちに依拠して彼の骨相学学説が正しいことを証明しようと考えた。彼に続いた研究者には、ジョルジュ<sup>17</sup>、エスキロル<sup>18</sup>、ルリュ<sup>19</sup>、フォヴィユ<sup>20</sup>、カルメユ<sup>21</sup>、ルール<sup>22</sup>、プリチャール<sup>23</sup>がいる。彼等は、ガルとは反対に、骨格現象を利用することで白痴症状を研究しようと考えた。それは、ガルの学説を打ち破るためでしかなく、哀れな白痴者たちの利益のためなどではなかった。彼等は白痴者たちを不治だと断言したのである。こうした単純な、反論という目的意識を持って、彼等は、30年の歳月をかけて、死者・生者の白痴者たちの頭の大きさ、重さを計測し、計量した。そして次のような結論を得るに至った。――

1. 頭蓋骨の全体的な発達と知的程度との間には一定の関係は存在しない。
2. 頭蓋骨の前頭部の面積、とりわけ前面の面積は、少なくとも、白痴者と他の者との間では同じ大きさである。
3. 白痴者の5分の3は通常の知性の人間より頭が大きい。

4. 知的程度と脳の大きさとの間には一定の関係がない。
5. 白痴の程度の違いは脳の重さによっては量ることができない。
6. 完全に形成された頭蓋骨は、不完全に形成された、いびつな、などの脳を含むことがある。
7. 時には、白痴者の脳は、通常の脳とは形、色において変わることがないことがある。  
さらに言えば完全にノーマルである。

こういった解剖心理学的事実をこそ、立証したのだと、彼等は主張した。しかし、白痴たちの教育と治療に関して言えば、35年間、新しい論理は語られなかった。その幕切れの時がやってきた。私の最初の仕事がイタールの仕事場で遂行されたのである。そこは、老人が若者に提供しうる非常に価値ある贈り物—彼の経験の実際的成果—を、私に授けてくれたところであった。

(1) モネルおよびフルリ著『臨床医学要綱』<sup>24</sup>参照。

イタールは、私が彼の成果についてあれこれ訊ねる間は、時として高慢な態度をとっていた。その病状が死を襲うまでになった症状つまり耐え難い苦痛に襲われたころになると、非常に高度な問題について二人でディスカッションするようになった。彼は苦痛で顔をゆがめ、身体をよじった。しかし彼の精神は、一時なりとも、明晰さ、正確さを失うことなどは全くなかった。私は、1838年にパッシー<sup>25</sup>でイタールが死ぬ時まで、彼が白痴者たちに及ぼした力の秘訣を、その学説上の弱点のまま、学んだ。

私の初期の患者達<sup>26</sup>にとって精神医学はイタールが書いていたことよりも良い改善手段なのかどうかということを知りたくて、私は、毎週、患者達をエスキロールのところに連れて行った。エスキロールは精神医学の大家であったが、彼は何も私に教えることはしなかった。しかし、彼は申し分のない手際の持ち主であった。彼は、私が彼に提示する実践過程の妥当性について、非常に卓越した助言を与えてくれたのである。彼が認めてくれるたびに、私は、自分のやっていることに勇気づけられたものである。そうしている間にも、彼がついぞ知ることのなかった理論を私の内面で熟成させていた。

この理論とは、先に挙げた人々以上に優れたものであり、同時代人から借用したものはなかった。私の最初の諸実験は先行する世代から借用したものであった。

サン・シモン著『新キリスト教』、今は亡き使徒オランダ・ロドリグによる口述と文書による個人授業、議長ビュッシュエ<sup>27</sup>著『歴史学』、カルノとシャルトンの『百科全書雑誌』、ピエール・ルルーとジャン・レノウの『大衆向け百科全書』。サン・シモンを除き、これらの人々と私は親しく交流を持った。そしてそれらの書物・雑誌は、私が理論医学の諸原則の奥義に分け入っていくための手がかりを得る、活用源なのである<sup>28</sup>。

これらの諸原則の原理は次の通りである。神の統一体、それは神の三つの原理的特質に

示されている。神が人間について三つの顕示をしたもうた人の統一体。白痴者は他の人間と同じように神の被造物である<sup>29</sup>、ただし三位一体という顕れ方において弱さがある。その弱さとは、第1に、運動能力と感覚能力における弱さ、第2に、認識と推論における弱さ、第3に、感情と意志における弱さ、である。その弱さが一つであろうが三重苦であろうが、人々がそうであると同じように、それぞれ克服することができるのである。ただし、それは、白痴者にとってふさわしい訓練によって達成されるものである。人類の足跡に見るやさしく、きびしい訓練の数々と同じである。

白痴者—この被造物は現在に至るまで嫌悪の目で見られてきた—を、次のように、道具に仕立てることは19世紀の精神にふさわしいものではない。人間学を解明するために資すること、人間の本性についての真実の理論は神性についてのより良き理解から生まれるということを証明するために資すること、さらにはわれわれと我らの創造主との間をこうしたヴェールの類で覆い隠すことに資すること。そのヴェールというのは、今は謎とされているが、来る世代は本当のこととして認識することだろうというのである。

しかし、本当の学問的な原理を見つけたことで十分だというのではない。原理を適用してみることが必要なのである。適用において、歴史的でも編年的でもない経験と比較とのみで試された、まさしく実践的な仕事によって、体系的でなく秩序立てられていないような原理はすべて誤りであったり、役に立たなかったり、不可能であったりすることが分かった。そうして、教授と進歩のための思いつきでしかない方法のすべてを取り除いた後、白痴者の治療は、人類の教育が幾世代もの時を重ねて辿ってきたと同じ歩みに従うようになったのである。すなわち、民族や個人の最初に必要としたことは活動的な感覚力である。その感覚力によって人間は、進み、行動し、闘い、そして勝利する。この必要性は、古代種族にとっては、競技スポーツや闘いの訓練への導きの源であった。テーベからリュクサーに到るところにみられる歴史的建造物<sup>30</sup>にさえ私たちはその痕跡を見出す。私たちは、こうした古代の人々の体育に、白痴者たちの教育の第一歩を見出したのである。

自発的な活動に乏しいこうした人々にとって、模倣は進歩のための、非常に威力を発揮する手段のひとつであることが分かった。だから、模倣的な諸力の刺激は、生理学的、心理学的、精神的治療のすべてにおいて、主要な位置を占めるのが当然である。このように注目した結果は次のようであった。生理学的秩序においては、ジェスチャーや体育に適用された模倣は、白痴者たちに身体の注意力と機敏さとを与える。そうして、模倣は目当てを持たないジェスチャーから個人的ないしは社会的目的を持ったジェスチャーへと転換され、自発的で恒常的な活動を誘発する。その活動が、いつでも、単純であろうが複雑であろうが、作業を生み出すことが出来る。こうして労働能力が獲得されるのである。

白痴症状のひとつの特徴として、一個体において、諸感覚機能に、つねに、一つあるい

は一つ以上の異常、すなわち欠損、欠陥、鈍重あるいは異常な昂進が見られる。白痴症状のこのような感覚徴候は非常に多様な現れ方をし、時に触覚、時に味覚、時に嗅覚、時に聴覚に、そして視覚にしばしば作用する。それらは18世紀の唯物論学説を裏づけるのに非常に有効であった。イタールはそれらすべてが白痴状態を構成するものだと考えたのであった。結局、彼の治療は諸感覚の異常を修復することだけが目指されていたわけである。それに対して、19世紀の学説は、諸感覚は精神でもましてや魂でもないということを、つまり、感覚器官の発達は、それぞれ、筋肉が発達すると同時に現れ、突き進んでいくということを、われわれに教えてくれている。さらにまた、これらが達成されたとしても、精神と魂、知的ならびに道徳的規範にはまだ及んではいない。すばらしい意外な事実！つまり、人間の三位一体の第一の相を白痴者たちの治療の端緒として関わらせたのだった。

こうして、白痴たちの治療のために処方箋を与えた人々は19世紀の先進的な人々そのものように思われる。彼等は人間学を救った人々だった。人間学は聖書からはなれたところで白痴の治療をし、聖書が言う「われわれの自画像に従ってわれわれのイメージで」人間をつくっていたのである。

諸感覚は人間にとって、精神が出入りするドアであるから、われわれは白痴者の諸感覚の治療をした。実際の生活場面で、ゆがんだり、狭すぎたり、不完全であったりする入口がいろんなやり方で修理されると同じように、われわれは諸感覚を矯正したり拡張したりした。さらに、われわれはこれらを始めるにあたって、子どもたちの身体属性の実体観念と、簡単で有益な、心地よい諸物に関係する幾つかの簡単な言葉とを結び合わせることを利用した。これらの初期の言葉群は二種の現れを含んでいた。——第一は実用の言葉をそれぞれの対象と結びつける要求である。第一のそれは無限の広がりを持ち、人を、ギクシャクした歩きから水蒸気より早い推進力のある働きの探究へと次第に導いていく。第二は驚きである。驚きは、誰にとっても、文明化された人にとってと同じように未開人にとっても、賢人にとってと同じように白痴者にとっても、喜びと発見と、想像のもとを提供するものである。ミッシェル・モンテーニュ<sup>31</sup>は好奇心を「われわれをすべて絶え間ない探索へと駆り立て、その後幾つかの新しい経験へといざなってくれるあの魅力的な激情」と呼んでいる。白痴者たちはその自然の好奇心—あらゆる進歩の母—を持っていないかのように見える。だが教師は、好奇心を白痴者の中に目覚めさせることができるのである。

こうしたことを実行するために、白痴者は古代民族が開発したと同じような一連の治療を受けなければならない。光のまばゆいばかりの輝き、暗闇の深い陰、色彩の鮮やかな対照、形状の限りない様態、物質の滑らかさや硬さ、音楽の出音と停止、人の身振り、見ることおよびしゃべることの見事な調和、これらは生理学的教育から知能教育へ移行するにあたっての強力な仲介なのである。

それから、ためらうことなく、本を用いる！その本は私たちにアッシリア人やユダヤ人の知育のやり方を教えてくれる。思考の象徴表現が視覚と触覚とで分かるように描かれ、彫り込まれ、深くあるいは浅く刻み込まれている。象眼の法典が雷や閃光の中に見えるのだ。それと同じやり方で、つまり歴史の中に見出される力強いやり方によって、現代の精神が隠喩された象徴物が白痴者に見せられる必要がある。みんなを一緒に見、感じることで白痴者は理解するだろう。

ほとんどの場合、白痴者たちの間には会話が存在しない。彼等に話すことを教えるためには、次のようなことを心に留め置く必要がある。—第1、原初的な言語は単音節であること、第2、それらは音楽のようなリズムを持つこと、第3、それらは、まず、非常に激しい感情のこもった音の高さできわめて強い要求を表現すること。さまざまな器具を操作させることによって、白痴者が話したり、読んだり、数を数えたりすることが出来るようになる。それらの器具の助けを借りて、白痴者は、精神の教育が可能となる。つまり、この過程の中ですでに精神の教育が為されているのである。引き続いて指導の第2期に突き進む。発達の手段が尽きるまで、全力を尽くすのだ。人はすべて知性に限界がある。白痴者の精神のそれはもっと制限されていると思う。そこに行きつくまでに、白痴者に、歩くこと、まっすぐ立った姿勢を保つこと、ものをしっかり握ること、運ぶこと、行動すること、見ること、聞くこと、話すこと、読むことが教えられる時期がある。これらの活動はそれぞれが無秩序に関わっているのではない。ちょうど風景画で描かれている光景がそれぞれで釣り合いが取れているように。しかしこれらの引き続く諸段階は、すべて、一つの原則で貫かれたということである—*精神訓練の原則*。

白痴状態で一番本質的なことは、*精神的な意思力の欠如*である。それが*拒絶意思*によって機能しなくなっている。白痴者の治療が構成することの中には、本質的に、*拒絶意思*を肯定意思に、心内にしまい込んでいる意思を社会性があり有益な意思に転換させることが含まれる。それが*精神訓練*の目的である。

痴者は何も望まない、ただ彼はうつろであり続けようとする。この病的な意思を首尾よく治療するために、医師は、白痴者は活動し、自身で、自身について、最終的には自身のために考える必要があると、望む。精神科医の絶え間ない意思作用は白痴者を、その白痴状態を抜け出し、活動、思考、労働、義務ならびに情愛の深い感情の領域に入るよう、絶え間なく後押しする。それが精神療法である。白痴者たちの拒絶意思は押さえ込まれ、自由と奨励とが初期に表れる活動的な意思作用に対して為され、この新しい力によって不道徳的な性向が抑制されることで、活発さと生き生きとしたさまが混じった言葉が、あらゆる機会に促進されることになる。訓練の精神部分とはどんなことでも分離されることはない。ただ訓練の他の全ての部分に関しては、読みを教えたり、子どもっぽいゲームを一緒にす

るとかを、付随させたり付加させたりする必要がある。われわれが白痴者のことでうまくいくように強く望むのなら、われわれの意思で彼を統制しよう。彼もまた意思を持つようになるはずである。

このこと—*精神療法*—が有力な方法であることについて、その起源を探ってみよう。狂気に下剤をあるいは白痴者の頭骨の機能低下に瀉血を用いるという誤った考えや意見を正そうとする計画を医師が思い付くより遥か前に、スペインでは、何世代にもわたる修道士たち—かれらは治療にも携わっていた—が、薬物に依るのではなく精神訓練だけであらゆる精神病に非常な成功を収めてきていた。一定の規則正しい労働、単純でたゆまない義務の履行、開化的で自主的な自発意志、患者たちを常に観察すること—このようなことが治療に用いらただけであった。善良な神父たちは言った。「私たちはほとんどすべての精神病者を治しています。ただし貴族は除きます。かれらは自分の手を汚して働くことを不名誉だと考えたがるものですから。」死に瀕したある貴族の最期の言葉、—「何もしたくない、さもなくば死を」。その貴族は狂気であったにもかかわらず、そう叫んだ。人びとはただちに返した、「死はただただ、働く人にとって生命と自由への権利なのです。」

考えてみるに、それは不思議なことではない！—これらの人びとは俗世や人間の科学とは隔絶し、キリスト教的愛以外の知識を持たなかったのだ。—しかし、かれらのたったひとつのそして信仰に基づいた目一杯の義務で、狂人に対して、激しさには穏やかさを、痴呆には注意を、破壊衝動には有益な労働を与えた。このようにかれらは、実際に、さまよえる魂から悪魔を追い出したのである。狂人たちは、これらの貧困な修道士たちが患者に次のように言っていることは何も分かっていなかった。—「神の御名において被造物と聖職者よ、汝の活動を制御せよ。神の名において、万有の偉大な思索家よ、汝の思考を制御せよ。—神の御名において、偉大な愛する人よ、汝の感情を制御せよ。」これらの貧困な修道士たちはただその信仰にもとづいて行動することだけを知っていた。そしてわれわれは—われわれが、盲目の信仰ではなく卓越した信念、すなわちその試みに対する理由を持っており、修道士たち以上のことを実施している。われわれは、白痴者に治療を適用する際に、為すべき理由と方法とを知っているのである。

こうして、白痴者たちのおかげで、スペインの修道士たちの手の内にあった神の奇跡は、人間学の基本的な原理となっている。それが白痴者たちの治療と教育との起源なのである、部分的には神により部分的には人間により。そうは言っても、われわれは、治療と教育との、そしてわれわれの偉大な発見の基底には神が存在するということは、はっきりと理解しているのだが<sup>32</sup>。



## 解題

## 1

エドゥワード・セガンは、1812年、フランス王国東部・ブルゴーニュ地方の、薪材の生産搬出と売乳（乳母）を主たる産業とする、小さな町クラムシーに生まれた。父親ジャック・オネジム・セガンはパリの医学校で医学博士を得て後、クラムシーに医師として入植した。近代精神医療の魁フィリップ・ピネルは博士論文の主査である。

エドゥワードは、10代半ばにパリに出、超エリート養成の中等学校王立コレージュ・サン＝ルイに学んだ。在学中、サン＝シモンの唱える「新キリスト教」主義に共鳴しサン＝シモン教教徒となる。また、コレージュの後、パリの法学部に進んだ。1830年代、後述の白痴教育の他、文筆活動等を通してサン＝シモン主義運動に加わり、また共和主義者として政治運動に荷担。王政転覆を謀る秘密結社・家族協会の組織メンバーとなる。国家転覆の陰謀の容疑で逮捕されるほどの山岳派ラジカリストであった。

1837年、25歳の時、唾で重度の知的障害（白痴）の子どもの教育を手がけたことをきっかけとして、その生涯を、白痴者の教育と福祉の確立・発展のために身を捧げた。

J.M.G.イタルによって白痴教育の夜明けが告げられたとされているが、その30数年後、イタルの手引きを得て、セガンは、白痴の子どもすべてに有効な教育の開発に挑戦した。初めは一人の子ども、続いて複数の子どもの適用する教育を私塾で進め、続いてフランス王国公認の寄宿制私立学校を設立した。さらには、そこでの成果をもって、多くの白痴の子どもが収容されている公共施設（「救済院」）での教育に挑戦し、自身の開発した白痴教育を適用、大きな成果を上げた。世に知られる「セガン教具」の開発もこの時である。ヨーロッパやアメリカにその名を轟かせることになるが、白痴たちへの作業療法等で一定の成果を得ていたフランス社会の精神科医たちとの対立が激化するようになる。1843年末に救済院勤務を罷免された後、セガンは、自身の教育論の体系化を果たした（1846年『白痴などの精神療法、衛生ならびに教育』、原題：*Traitement moral, hygiène et éducation des idiots et des autres enfants arriérés au retardés dans développement, agités de mouvements involontaires, débiles, muets non-sourds, begues etc.*）。700ページを優に超える大著は斯界のテキストとされたばかりか、後年、マリア・モンテッソリーの教育論を誕生させる源となる。

その後フランス社会で白痴教育に携わることはなかったものの、共和主義者セガンの魂は強く生き続けていた。フランス社会は1848年2月革命によって王政から第2共和政に移行するが、セガンはこれに積極的に貢献した。しかし、時を置くことなく政治反動が強まり、セガンと共に革命運動に参加した多くの同志たちが弾圧を被るようになる。その動き

を見てであろう、セガンは、フランスは自らと家族が生きる大地ではないとみなし、アメリカ合衆国に移住した。精神的には亡命に近いだろう。1850年、38歳の頃のことである。

セガンはアメリカ社会における白痴教育・福祉の世界の指導者として熱烈に迎え入れられた。白痴教育ばかりではなくアメリカの医療改革や教育改革にも力を提供する。1861年、ニューヨーク市立大学から医学博士号が授与された。1880年、フランス名エドゥアール・オネジム・セガンは赤痢に罹病しその生涯を閉じた。セガンが開設した生理学学校（Physiological School for Feeble-Minded Children. 1879年ニューヨーク市に開設、後、ニュージャージー州オレンジに移転）には、彼の死後の1896年に瀧乃川学園の石井亮一が訪問しており、「セガン教具」はじめ、セガンの教育遺産を我が国に持ち帰っている。石井は、セガンの『1846年著書』（仏語）『1866年著書』（英語）を「これぞ今日に至るまで白痴教育家の宝典」だと絶賛している（『石井亮一著作集』第1巻、1940年）。

セガンは普通教育についても言及しており、とりわけ子どもたちを教室や机に「縛り付ける」教育ではなく、「学校園」等自然の中での学びを強く推奨している。それはどちらかというところ鍛錬を指向している。また、教科書一辺倒の学びではなく、子どもたちが生活の中で身につけた知識や社会性の意義を高く評価している。こうした「生活教育」的な観点からも、セガンを再評価する必要がある。

## 2

セガンの1856年論文は、(1)セガンが白痴教育を手がけるに至った過程およびそれに影響を与えた人物や思想、(2)白痴の訓練と治療の歴史的起源とそれを担った歴史的背景の二つのパートから構成されている。もちろんそれぞれが無関係に述べられているのではない。それとともに、セガンは白痴教育を手がけ始めるとともに旺盛で多角的な研究をも始め、その成果として、セガンに独自の白痴に対する治療と訓練とを開発・発展させていったことが述べられている。

この論文はセガンのフランス時代における総決算とも言える。フランス近代社会の夜明けとともに、白痴たちにも夜明けが告げられた。せいぜいのところ「凶暴な狂人」「狂人」「てんかん患者」分類されていたにすぎなかったフランス革命以前の精神病理に対し、革命後の精神医学の急速な進歩によって、「白痴」が分類され、「白痴は不治の病である」と規定された。さらに実証的研究が進められて行くにつれ、「白痴は病なのではなく現象であり、終生その状態を保つ」と規定されるようになる。このことによって「白痴」に対する精神医学者による訓練や「特殊教育」が試みられ始めた。そのための施設エコール（学校）が設立される。もっともこの「学校」は公教育機関ではない。

「白痴」は「訓練され治療され教育されうる存在者」であることのヴェールが次第に剥がれていく、そのプロセスに若きエドワード・セガンが参加し、やがてその実践成果は

ヨーロッパ・アメリカ社会における白痴教育のモデルとなっていた。本稿からそのことに対するセガンの誇りがひたひたと伝わってくる。

ところで、セガンの白痴教育はジャン・ジャック・ルソー『エミール』(1762年)の論に影響を受けていると言われてきた。我が国のセガン研究では定説となっている。しかし、1856年にセガンが発表したこの論文には『エミール』もルソーも、その名は登場していない。それどころか、セガンは、18世紀の感覚主義哲学(「18世紀の唯物論」)を根拠とする白痴教育は誤っており、19世紀の哲学(「新キリスト教」に発するサン＝シモン主義)による白痴教育こそがすべての白痴たちの福音となった旨を述べている。この論文はセガンがアメリカ合衆国入りしてから初めて発表したものである。その意味では、彼のフランス時代の総決算であるだけではなく、アメリカ社会における方針であるとみなすことができる。そして、この論文にルソーの名が登場してこず、サン＝シモン主義、聖書が登場することの意味は大きい。ちなみに、サン＝シモンの「新キリスト教」は聖書の原点に戻れと主張するプロテスタンティズムである。フランス時代の諸著作にもルソーに言及する一文はあるにしても白痴教育の哲学として援用する痕跡を見出し得ない。したがって、セガンの白痴教育の成立過程とその哲学的構造を明らかにするのは、ルソーの論にではなく、セガン自身が指摘しているように、サン＝シモン主義者の各論に拠るべきであろう。

とはいうものの、アメリカ時代のセガンの言説にはルソーを評価する姿を見ることができ。例示すれば、1866年に公刊した、前掲『1846年著書』の英語版とも言われる大著『白痴および生理学的方法による白痴の治療』(原題: *Idiocy And Its Treatment By The Physiological Method*)の序文には、生理学との関わりでルソーの名が取り上げられている。同書が公刊されたのは、『エミール』が広く読まれるようになり、いわゆるルソー主義による教育の先駆者たちの成果と名声が大きく喧伝されるようになった時期と重なっている。これらのことを考慮すれば、『1866年著書』は『1846年著書』の単なる「フランス語版の英語版への翻訳書」なのではなく、ルソー等感覚主義哲学の再評価によって「書き改めた」とみなすことも可能である。つまり、セガンの白痴教育論は彼自身の中で「進化」していた、ということである。これらの検討は後日に詳しくしたい。

### 3

セガンは師匠イタールを高く評価しつつ、その一方で厳しく批判している。批判のロジックはそれで整理がつくが、批判対象となっている事実は、セガンの言い分から離れて検証されなくてはならない。結論から言えば、イタール実践に関わることから幾つかの重大な誤認がある。このことに関して注記を詳しくしておいたので、ここでは再現しない。ただ、どうしても頭をひねってしまう。セガンはイタールからあらゆることから学び取ったのではないのか?もしそうだとしたらイタールはセガンに<嘘>をついたとしか考え

られない。しかし、イタールは、<嘘>をついたところで、何ら得るものはない。

「少年は、そういった痛々しく実りのない挑戦の果て、ある病院に幽閉されてしまったのである。」とセガンは言うが、セガンの言うようにイタール実践が6年間だったとしたらヴィクトールは1807年にはイタールの手から離されたことになる。しかし、史実は、ヴィクトールが、看護人のゲラン婦人とともにパリ王立聾啞教育施設を出されたのが1811年、聾啞教育施設が所有する近在のアパートにふたりは身を移す。ヴィクトールがそこで数奇の生涯を閉じるのは1828年初め、セガンがパリに上ったばかりの頃である。アパートに居住させたのもほかならぬイタールであった。それは「幽閉」する目的でもなく、「発達の可能性に対する強い好奇心を断ちがたく、いつでも実験ができるように」という目的からだった。その動機を証拠づける文献がある。ヴィクトールの死の前年、1827年に刊行された *Johann-Christoph Hoffbauer, Médecine légale relative aux aliénés et aux sourds-muets, ou Les lois appliquées aux désordres de l'intelligence* (J-C. ホフボウ『精神病患者、聾啞者に関する法医学、あるいは知性の障害に適用される諸法』) がそれである。同書には詳細な注が施されており、注の文にはその筆者の署名が付けられている。「聾啞」に関する章では **J. M. G. Itard** が注記しており、「全く動物のような暮らしでいのちを紡ぎ、森の中でひとりで生きた人間に見られたある状態が、先天性の白痴なのかたまさか愚鈍・白痴のような状態なのかの検討は、今もなお必要である。この事例のようなことはいくつもあり、その事例の一つとして、今世紀初め、アヴェロンの森に棄てられたひとりの子どものことを挙げることができる。云々」と書いているのである(183頁、下線引用者)。セガンが言うように、イタールが実験の幕を下ろして少年を病院に幽閉したのならば、このようなイタールの問題関心は表明されることはないだろう。だからこそ、もし、イタールが全てをセガンに語っていたとしたら、ヴィクトールがどのような最期を遂げたのかも語っているはずである。

セガンは、口伝でイタール実践を聞いてはいないのではないだろうか、と思うのが率直なところである。

なお、セガンの論文に、多数の人名が登場する。これらについて可能な限り注解を施した。また注解では、人名注解の他に、セガンの認識に対するクリティークを施している。

清水寛編著

『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』全4巻、

日本図書センター、2004年

川口幸宏著

『知的障害教育の開拓者セガン～孤立から社会化への探究』新日本出版社、2010年

## 訳文注解

<sup>1</sup> 1801年に公刊されたいわゆる『イタール第1報告書』（原著表題直訳：ある野育ちの人の教育について、すなわち、アヴェロンの野育ちの少年の身体と精神の初期発達について）のこと（E. M. Itard, *De l'éducation d'un homme sauvage, ou Des premiers développements physiques et moraux du jeune sauvage de l'Aveyron*, Chez Goujon fils, Imprimeur-Libraire, 1801.）。なお、イタールのフル・ネームは Jean Marc Gaspal Itard (J. M. G. Itard 1774-1838)であるにもかかわらず、彼は E. M. Itard の名を好んで使っている。邦訳書: J. M. J. イタール著中野善達・松田清訳『新訳アヴェロンの野生児 ヴィクトールの発達と教育』福村書店、1978年。

<sup>2</sup> P. J. Bonnaterre. 生没年等不詳。この当時、アヴェロン県中央学校博物誌教授であった。アヴェロン県で「発見」された野育ちの少年の最初の観察記録『*Notice historique sur le Sauvage de l'Aveyron et sur quelques autres individus qu'on a trouvés dans les forêts, à différentes.* (アヴェロンの野育ちの人と、さまざまな時代に森で発見されたそれぞれの人に関する話の概略)』（1800）を纏めた。

<sup>3</sup> 原語 wild. ルソーの言う「野性」と区別する必要があるため、「野育ち」とした。フランス近代の「文明」化に対して言われた「野蛮」という意味合いが強い。ヨーロッパ中心の「近代」論を誕生させたフランス革命期の「文明」観を検討する必要がある。

<sup>4</sup> Roch Ambroise Cucurron Scard (1742-1822)はパリ聾啞学校の代表教師であった。手話法を大成させた。言語学者として高い評価が与えられている。人間観察家協会メンバー。

<sup>5</sup> セガンのこの記述は不正確である。少なくとも当事史料によって追認することはできない。参考までに、アヴェロン県知事がイタールに宛てた書簡（部分）を以下に引用しておく。捕縛された少年がどのような暮らしをしていたか等について知ることができる当事史料である。

「(前略)

3. かれを留置した最初の頃、かれの振る舞い、性格、好みの食事、感覚機能、睡眠時間、身体外観はどのようであったか？

かれがロデーズに連れて行かれた時、食べ物の味の好みや願っていることとは違ったときなど、かれのめんどろを見るあらゆる人に嘔みつくクセがあった。かれは提供されるすべての食べ物の匂いを嗅いだ。ジャガイモ、クルミの実、栗の実及び茹でたインゲン豆以外の食べ物すべてを無視した。かれは少なくとも日中の半分、規則正しく眠った。衣服はかるうじて着たが苦痛な様子だったし、ごく簡単に布で覆っただけの藁敷きで寝た。徐々にパンやスープを摂ることに慣れた。肉も同様である。かれはつねに脱走を図ろうとし、2回成功した。しかしその度に捕縛されロデーズに連れ戻された。サン・タフリクに連れて行かれた時には、体つきは貧弱で、やせ細っていた。やがて、少しばかり太り背丈も大きくなった。つねに不潔であった。この子どもに見られる嗅覚と触覚は非常にすごい。

4. 食糧の確保や雨露をしのぎ寝る所の確保はどのようにしていたのか。

はじめの頃は、人々のかれを柏の木々が繁茂する森で見かけた。しかし、この森のはずれにジャガイモや野菜が育てられていたが、かれはそれらを食料としていた。また栗の木もあったが、間違いなくこの実もかれの食料とされていたようだ。

(後略)」

<sup>6</sup> Charles Michel de l'Épée(1712-1789) 手話法による聾啞教育の開拓者。一般的には、通称名 L'abée de l'Épée : ド・レペ大修道院長。参考：中野善達・赤津政之『世界最初のろう学校創設者ド・レペ 手話による教育をめざして』（明石書店、2005年）

<sup>7</sup> Benjamin Franklin(1706-1790) アメリカの独立に大きく貢献した。凧を使った実験で雷が電気であることを説明したことで知られる。

<sup>8</sup> 科学アカデミーとは別組織の「人間観察家協会」である。セガンはイタールが協会会員であったとしているがそれは誤りである。イタールは「人間観察家協会」とは別ルートで内務大臣から許可を特別に得て野育ちの少年の治療・訓練・教育（の実験）を行った。イタールは当時まだ医学博士でもなく医学界では低位に属していたし、これといった特段の業績を持っていなかった故に、精神医学、言語学、博物学等の名士によって組織されていた「人間観察家協会」の一員になってはいない。「人間観察家協会」の目的の本質は、「文明」研究、すなわち世界のフランス化

のための研究にあった。

<sup>9</sup> Philippe Pinel (1745-1826) 「精神病者を鎖から解き放った人」という逸話に示されているように、人道的な心理学的臨床を重んじる精神医学の創設者。なお、ピネルがアヴェロンの野育ちの少年を白痴だとした報告書(1800年、1801年)は、中野善達・松田清訳イタール前掲書に『アヴェロンの野生児』の名で知られる子どもに関する人間観察家協会への報告」として翻訳されている。ピネルは「白痴」を *idiotisme* という概念を提出し、「不治の病」だとした。

<sup>10</sup> セガンの誤認。少年ヴィクトールは聾啞学校の生徒の身分を与えられており(年金 500 フラン)、イタールの自宅に引き取られたことはない。女性家庭教師とあるが、聾啞学校によって雇用された女性看護人ゲランのこと。

<sup>11</sup> John Locke(1632 – 1704). イギリスの哲学者。社会契約説や立法権と行政権の分立論などで知られる。また、経験主義に基づく認識論は、セガンの白痴教育論とのかかわりで重要な意味を持っている。

<sup>12</sup> Étienne Bonnot de Condillac(1715-1780). フランスの哲学者。前述のロックから決定的ともいえる影響を受け、感覚に重点を置いた感覚論、経験論哲学を論じる。ジャン・ジャック・ルソーやディドロなどの啓蒙主義思想家・哲学者と交流を持った。

<sup>13</sup> セガンの誤認。ヴィクトールは 1811 年に聾啞学校を出された。以降、ゲランを世話人として、聾啞学校の近在のアパートで生涯を送った。

<sup>14</sup> Louis-Benoit Guersant (1777-1848) の極めて簡単な略歴を示しておく。1777 年 4 月 29 日ドルックスに生まれる。パリの医学校で医学を学び、1793 年医学博士となる。1798 年ルーアン中央学校で博物誌担当、1804 年年ルーアン植物園植物学教授。1815 年にはヨヌヌ県、コート・ドール県に出かけ、コレラの対策にあたった。1818 年 5 月パリの病弱児施療院長となる。1848 年 5 月 25 日死去。息子の P. L. B. Guersant (1800-1869) は外科医でビセートル救済院や病弱者施療院で勤務している。

<sup>15</sup> セガンが師イタールにはじめて触れたのは、『知能の遅れた子どもと白痴の子どもの教育の理論と実践 第二・四半期 不治者救済院の若い白痴への訓練 (*Théorie et pratique de l'éducation des enfants arriérés et idiots Deuxièmes trimestre. Leçons aux jeunes idiots de l'hospice des Incurables*)』(1842 年、Chez Germer Ballière、未邦訳) の注記においてである。彼は次のように言う。「イタール博士氏はわが父とはヴァル・ドゥ・グラス(陸軍病院、医学研修の場)での元学友で、私の最初の研究をしっかりと指導しようとしてくださった。そればかりではない。彼が 1800 年来白痴教育に関して集めてきた宝の山＝観察結果を一気に私に開示してくれた。それらは、イタールが彼の最初の生徒、かの名高いアヴェロンの野育ちの子に教育を施した際のものであった。彼は、もう決して使うことのない資料を私が意のままに使うことを許し、40 年に及ぶ経歴を有する非常にすばらしい仕事を私の若々しい情熱に任せたのであった。」(下線引用者)

ところがこの賛辞は 1843 年に著した本格的な白痴教育論『白痴たちの衛生と教育(*Hygiène et éducation des idiots.*)』(*Annales d'Hygiène publique et de Médecine légale. Tome XXX.*

Paris. 1843. 邦訳: 中野善達訳エドアール・セガン著『知能障害児の教育』福村出版、1980 年、所収。)以降、誤認を含め、厳しい批判へと転じられるようになる。

<sup>16</sup> Franz Joseph Gall (1758 – 1828). ウイーンで開業していたドイツ人医師。1807 年からパリで精神病の研究を進める。骨相学の父。脳の解剖学と神経の生理学の研究につとめた。この期のフランス精神医学界に強い影響を与えた。

<sup>17</sup> Étienne-Jean Georget(1795-1828) エスキロルのラ・サルペトリエール救済院勤務時代の弟子。博士論文「狂気の原因に関する論考」(1820)。著書『狂気あるいは精神異常に関する法医学論』(1826) ほか。神経組織の研究を手がけた。

<sup>18</sup> Jan-Étienne-Dominique Esquirol(1772-1840) ツールーズ、モンペリエで医学を学んだあと、1799 年パリ医学校に進み、ピネルの薫陶を受ける。1811 年ラ・サルペトリエール救済院の医師に任じられ、1826 年にシャラントン精神病院長に就任。シャラントン時代に、精神病者を鎖から解放したことやいわゆる「精神病患者保護法」(*Loi sur les aliénés n° 7443 du 30 juin 1838*) に見られるように、精神病医療の近代化に大きく貢献した。医学アカデミー創設(1828) 委員。

ピネルが *idiotisme* の概念を用いて「白痴は不治の病である」としたのに対し、ピネルの弟子であるエスキロールは *idiotie* の概念を用いて「白痴は変わる事のない現象である」と説明した。エスキロールは J. M. G. イタールと親密な間柄であったことからであろう、イタール亡き後セガンの指導をしたとされている。セガンは本稿で毎週のようにエスキロールの許に通ったと記し、またエスキロールが治療していた白痴を預かって被験者としたと記している（前記『白痴たちの衛生と教育』1843年）。それは、エスキロールが私的に開設していた施設（イヴリー通り、パリ 12 区）のことだと推測される。

<sup>19</sup> Lerut. 人物不詳。『植民地医学・薬学雑誌(*Annales de médecine et de pharmacie coloniales*)』第 23 号 (1825 年) は、Leret が第二階級の軍医であるとの肩書きを付している。マラリアの継続的治療に関する投薬回数についての著述がある (1825 年)。この点から言って、セガンが言う Luret と同一かどうかは不明としか言いようがない。

<sup>20</sup> Achille-Louis Foville(1799-1878) パリで医学を学びラ・サルペトリエール救済院でエスキロールなどに師事。1824 年に学位を得、翌年、エスキロールの後押しを得て、セヌ・アンフェリウール県内の新設の精神病院長、ルーアン医学校の生理学教授に任じられた。1836-1837 にアフリカ・アメリカに渡るが、1840 年 12 月のエスキロールの死を受けシャラントン精神病院の主任医師となり、師の跡を継いだ。

<sup>21</sup> Louis-Florentin Calmeil (1798-1895) エスキロールの弟子。精神医学ならびに精神医学史の研究者。シャラントン精神病院で研究と治療にあたる。

<sup>22</sup> François Leuret(1789-1851) ラ・サルペトリエール救済院でエスキロールに師事。シャラントン精神病院を経てビセートル救済院の医師を務めた。代表的な著書『狂気の治療法について (*De Traitement moral de la folie*)』(Chez. J. -B. Baillière, 1840) はビセートル救済院での症例研究を多く含んでいる。

<sup>23</sup> James-Gowler Prichard(1785-1848) イギリスの医師。1808 年エジンバラで学位を得た。施療院医師として研究と治療に従事。晩年の 1845 年に精神医療委員会委員に任じられた。

<sup>24</sup> 全 15 巻の大部である書名等の原文詳細 : MM. Monneret et Fleury, *Compendium de médecine pratique, ou exposé analytique et raisonné des travaux contenus dans les principaux traités de pathologie interne, quinzième édition*. Chez Béchot jeune et Labé. 1844.

著者について : Jules-Auguste-Edocard Monneret(1810-1868) 1838 年医学部教員資格保有者、1840 年施療院医師、医学実務学校で教鞭を執る。Louis-Joseph-Désiré Fleury(?-1872) 1839 年医学博士、1844 年医学実務学校教員資格保有者。

<sup>25</sup> 現在のパリ市の最西端の地域。当時はパリ市に隣接する郊外のコミューン。鉱泉が出るのでリウマチ等の治療のための別荘が多く建てられていた。イタールは生涯結婚することの無かった独身者であったので、この別荘地での借家が訖の住まいとなった。

<sup>26</sup> 原語が複数形であるので、この訳語とした。初めはアドリアンという少年一人であったが、やがてフェリシテ・X という少女の教育に携わったことを推測させるセガンの回想があるので（前掲『白痴たちの衛生と教育』1843）、エスキロールのところにはこのふたりを連れて行ったのであろうか。事実は不明である。

<sup>27</sup> 人名ビュッシュェに「議長」との肩書きをつけたセガンの意図はどのようなものであったのだろうか。サン＝シモン主義者たちの組織「家族」での肩書きではなく、ビュッシュェは第 2 共和政下の国民議会の議長を務めている。

<sup>28</sup> 本文中に触れられているサン＝シモン主義者たちの名前のフルスペルと生没年等に触れておきたい。本文掲載順である。

Saint-Simon(Claude Henri de Rouvroy Saint-Simon 1760-1825), *Neuveau christianisme* (1825)

Olinde Rodrigues(1795-1851)

Buchez(Philippe-Joseph-Benjamin Buchez 1796-1865), *Philosophie de l'histoire* (*Introduction à la science de l'histoire, ou science de développement de l'humanité, 1833.* のことか?)

Carnot(Hippolite Carnot 1801-1888), Charton(Édouard Charton 1807-1890), *Revue*

*encyclopédique*,

Pierre Leroux(1797-1871), Jean Reynaud(1806-1863). ルルーとシャルトンの編集になるとセガンが言う *Encyclopédie populaire* は刊行されてはおらず、両人が編集したのは *Encyclopedie nouvelle* (『新百科全書』1833年刊行開始) である。セガンの記憶違いだろう。

サン＝シモン主義者は、1832年頃から、産業社会建設を目指し鉄道や銀行の創設に関わる「右派」と社会変革のためのイデオロギー創造や教育改革を目指す「左派」とに分派・解体する。セガンがここで指摘する「サン＝シモン学派」はいずれも「左派」に属した人物である。サン＝シモン主義家族が解体して以降(1832年)、セガンと「左派」との具体的な関係については未解明であるが、セガンが名を挙げているサン＝シモン主義者たちは、いずれも、1848年2月革命を受け第2共和政確立を進める臨時政府において重要な役割を果たしている。とりわけイポリット・カルノは、臨時政府下の公教育大臣となり、「カルノ法」と呼ばれる教育法案を立案した。この法案は、第2共和政下で左派共和政勢力(「左派」サン＝シモン主義者を含む)を政権から排除されたため、実施に移されることがなかったが、初等教育の無償・義務などを内容としたものであった。

<sup>29</sup> 白痴の処遇についてその歴史的な変遷過程の中で、この一文は大きな意義を持つ。すなわち、19世紀初頭にはいわゆる近代理性と呼ばれる世界観が支配し始めていたが、その世界観が及ばない・及ぼうとしない「世界」が多くあった。白痴はその典型例である。近年までの俗な表現を借りれば「白痴は人間ではない」ということであった。たとえば、イタールはヴィクトールを人間と認めたが故に教育を試みたのか?否、である。「人間化(=文明化)が可能ならばだ」「人間(野蛮人ではなく文明人)になりうるかどうか)の尺度のもとに実験をなし、時代・社会が願う(そしてその願いはイタール自身のものでもあったが)「人間」には及ばなかった(しかし、可能性は信じた)。

それに対して、セガンのこの一文は、白痴を神の全ての被造物の一員である人間として認めている。

これらの点から、セガンの白痴教育の基本哲学は、「白痴も人間である」という一般的に表現されている近代的理性と同一平面で評価されてはならないだろう。

<sup>30</sup> 古代エジプト時代(前2000～前1000)の遺跡。テーベ(Thebes)は古代エジプトの首都。

<sup>31</sup> Michel Eyquem de Montaigne(1533-1592). セガン原文では Michael Montaigne. 16世紀を代表するフランスの哲学者。代表的著作 *Essais* (エッセイ、1572年以降に執筆が開始され、初の出版は1580年。モンテーニュは終生原稿に手を入れ続けた。)。17世紀のデカルト、パスカルなどに影響を与えている。

<sup>32</sup> セガンが指摘するスペインの修道士たちの精神療法の具体を知る資料と出会うことができない現状である。しかしながら、セガンが白痴教育に人生の活路を見出し、その実践成果に西欧社会が目を見張っていたころ、フランス精神医学では「狂人」の概念規定を繰り返し検討していた。その作業から精神医学史がはじめて探究されるようになった。

Louis-Florentin Calmeilの全2巻で執筆された1000頁を超える大作(表題等後述)は15世紀から19世紀にかけての修道院などにおける精神医療について綴ったものであり、スペインもその舞台の一つとして採りあげられている。表題:*De la folie, considérée sous le point de vue pathologique, philosophique, historique et judiciaire depuis la renaissance des sciences en europe jusqu'au dix-neuvième siècle: description des grandes épidémies de délire simple ou compliqué, qui ont atteint les Populations d'autrefois et régné dans les Monastères* (1845) 概略邦題:狂気について。ヨーロッパ・ルネッサンスの世紀から19世紀までの病理学、哲学、歴史及び司法の各観点を元にしたその考察。